

中東におけるトルコの位置け
トルコの近代化、「トルコ・イスラーム総合論」と「トルコ・モデル」の観点から

ダヌシュマン・イドリス（立命館大学）

2022 年 9 月 23 日

はじめに

1) トルコって？

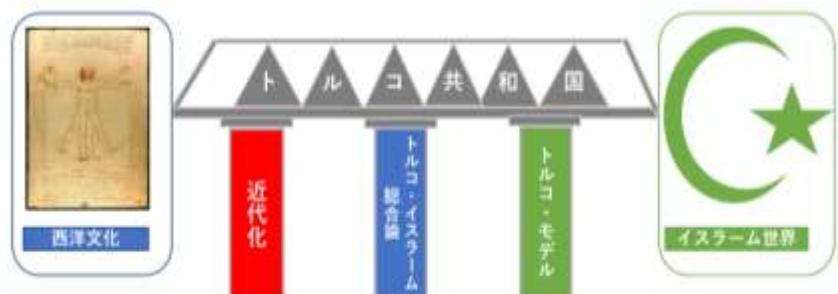
- トルコは、アジアとヨーロッパの2つの大州に跨る地域（アナトリア半島・東ヨーロッパ）に位置する、トルコ語を話すトルコ人の国家
- イスラーム教徒が大多を占める、世俗主義の共和制国家でありながら、キリスト教徒が大多数の EU に加盟しようとしている
- そのような様々な属性を持つトルコの中東との関係はどう説明できるか

2) 「東西の架け橋」という概念

- トルコ専門家の新井政美先生の批判
- オリエンタリズム批判に見られる、「野蛮な東洋（トアジア、ルコ・イスラーム）」対「文明の西洋」というユーロセントリックな虚構の上に立つ言説
- 言語学的には、「ヨーロッパ」は現在のヨーロッパより東方を意味していたし、地理学的にも、ヨーロッパはあいまい
- トルコには、EU 加盟候補国、NATO メンバー国等、様々な西洋的な側面があるが、トルコ人は、歴史的に中央アジアからの遊牧民であるため、ヨーロッパ的ではない
- 「ヨーロッパ」も「東西の架け橋」も東洋と西洋の関係のプロセスの中から生まれた概念
- そのプロセスに、三つの段階がある

3) 「架け橋」の3本の橋脚

- 1) 近代化
- 2) トルコ・イスラーム総合論
- 3) トルコ・モデル



4) テーマ・方法

- 「架け橋」と「3本の橋脚」を分析枠組みに、トルコの対西と中東との関係史を再考
- 18世紀から現代まで続く、文化的近代化（技術的な近代化と違う）の過程に焦点
- トルコの中東における位置づけ・役割の解明

5) 内容・ながれ

セクション1：トルコの近代化（1700年～1923年）

西洋の「外向け」の近代化（①人権問題；②宗教改革；③セキュリティ）の提示
トルコの西洋文化の取入れの略史

セクション2：「トルコ・イスラーム総合論」（1923年～2000年代）

世俗主義（laïcité）の導入、イスラームと、国民を基礎とする、
西洋的かつ近代的な国家の形成：トルコ性とイスラームの融合

セクション3：「トルコ・モデル」（2000年代～）

西洋的な価値観（民主主義・世俗主義等）とイスラームを融合させた模範として中東諸国に提示された特徴

セクション1：西洋の「外向け」の近代化とトルコの近代化

1. 西洋における近代化と異なる、外向けの近代化

- 技術改革より、西洋文化の導入が重視される、文化的近代化
- 西洋文化の中心的な価値観の一つである「自由化」に立脚しつつ、互いに重なり合う3つの分野を含むプロジェクト：①人権問題；②宗教改革；③対テロ戦争
- 外部からの推奨者、内部からの支持者、抵抗者が出た過程



①人権問題

オスマン朝（後にトルコ）の法律（イスラーム法）や文化（イスラーム文化）における様々な理念や実践が批判の対象。例：

- 少数民族問題（非ムスリム、多くの場合は、キリスト教の少数民族が対象）
- アルメニア正教会（アルメニア人）、ギリシャ正教会（ギリシャ人）の権利の保障
※西洋諸国による圧力（18世紀からの様々な条約において、少数派、特にキリスト教の少数民族の権利に関する箇条が現れた）例：1856 パリ条約において、オスマン朝は、キリスト教徒少数民族に有利な改革を約束させられた [Oran 2004: 12]
- シャリーア法に基づく厳重な体罰の減少の呼びかけ
- 女性問題：スカーフ着用、一夫多妻、等

②宗教改革

- 進歩史観にもとづいて、人間社会は発展するために、文明の進歩が必要と主張
- 「『進歩した』西洋社会には、『後進的な』中東のような社会を前進させる使命がある」と主張（※ これは、後に、植民地化の言い訳にもなった）
- イスラームのような宗教の「古い」ルール等が捨てられるか、再解釈されるべきである、というメッセージが、西洋によって発信されるようになる
例：
 - ウラマーの学説に基づく不統一なイスラーム法（シャリー法）の統一の必要性。マジャッラ（民法典）の作成（1868 年～1876 年）
 - シャリーアの廃止（1923 年）
 - 宗教学校（マドラサ）、スーフィー修道所（ダルガー、テッケ）の廃止（1925 年）
- 上記のような考え方・改革は、「プログレッシブ」と呼ばれる一部のムスリムによっても支持
例：科学を推奨したオスマン朝の「青年トルコ人（Genç Türkler）」
イスラーム神学の改革を目指した、ムハンマド・アブドゥフ（1905 年没）

③セキュリティ（「対テロ戦争」）

- 特に、植民地化された地域、独立運動時にに見られた戦略
- ガザー、または、ジハード（「聖戦」）は、近代化・社会の発展をもたらす西洋に対する反発・反乱を促すため、危険視
- そのような信念を持つムスリムは「ファナティック」と呼称
- ファナティックなムスリムは弾圧されるべき
例：ウラービー運動（1881 年）：エジプトにおける英物支配への反発、イギリス軍によって鎮圧

II. トルコの近代化

1) トルコの近代化の始まり：カルロヴィッツ条約（1699 年）

- 最初の領土の縮小で終わるカルロヴィッツ条約の締結後、西洋勢の技術的優越性に気づく
- 軍事分野において西洋の範を取る必要性が語られるようになる
- それ以降の 3 世紀間、2 つの国（オスマン帝国・トルコ共和国）において、5 つの近代化の試みがあった。3 つのアクターが特に有名

2) 技術的改革（18 世紀初頭～19 世紀初頭）

試み① 新秩序（Nizâm-ı Cedîd）

- フランス人のボンヌヴァル（Claude Alexandre de Bonneval、1747 年没）のような専門家によって、18 世紀初頭にイスタンブールで開始
- 最初の印刷所の開設（1727 年）、西洋的な砲兵学校の創設等の一連の技術的改革を誘発
- ムハンマド常勝軍（Asâkir-i Mansûre-i Muhammediyye、1826 年）の設立まで約一世紀間続いた
特徴：雇用西洋人による技術的な改革

3) 行政的改革（19 世紀）

- 試み②：ギュルハーネ勅令（Gülhane Hatt-ı Hümâyunu、1839 年）による恩恵改革（タンズィマート）
税制、官僚や軍事分野における一連の改革をもたらした
- 試み 3：改革勅令（İslahat Fermanı、1856 年）最初の憲法（Kanûn-î Esasî、1876 年）の確定に基づいて、議会の設立、スルタンの権力の規制やムスリム・非ムスリムの法の下での平等が宣言されたが、1878 年の議会の解散によって大きな効果をもたらさず閉幕
特徴：スルタンのリーダーシップの下で行われた、トップダウン型の行政改革

4) 政治的改革（19 世紀終わり頃～20 世紀の初め）

- アクター①：青年トルコ人（Jön Türkler）
 - 西洋主義の若い知識人や官僚によって始められた改革運動
 - 議会の再開を目指す「統一と進歩委員会 (ittihat ve Terakki Cemiyeti)」という秘密結社の下で活躍
 - 議会再開後に政党にもなるが、WWI での敗戦後の 1920 年の議会の再閉鎖によって解散され、メンバーが迫害
- 特徴**：大衆の支持が得られず、民主主義運動に展開できず

5) 宗教的改革 (19 世紀半ば～20 世紀初頭)

- アクター②: イスラーム改革運動

アフガーニー (1897 年没) が、ムハンマド・アブドゥフ等が掲げた、全てのイスラーム教徒の団結を説く「汎イスラーム主義」とムハンマド・アブドゥフの神学の改革の下で宗教への回帰、「古き良き時代」の再現が目指された

特徴: 国民主義の台頭とアラブ地域の独立運動に対して機能せず、失敗に終わった

6) 文化的改革 (オスマン帝国崩壊・トルコ共和国の建立～)

- アクター③: ムスタファ・ケマル・アタチュルク

➤ 諸方策が役に立たずオスマン帝国が崩壊し、領土が英・仏等の連合国によって侵略・植民地化
➤ 範を取ろうとした西洋の帝国主義と、統一を期待していた非トルコ系諸民族の分離・独立化に対して失望・挫折

➤ スルターン・カリフ制廃止、国民主権の推進 →トルコ共和国

➤ 脱宗教・世俗主義の導入: 文字改革 (アラビア文字の代わりにローマ字の導入)、伝統的服装の廃止 (洋服の導入) 等

特徴: 西洋に対して戦う西洋主義者による近代化

セクション 2 : トルコ・イスラーム総合論 (TIS)

1) トルコにおける宗教社会の扱いの複雑さ

- 共和国成立当初 (一党制) : マドラサ (1924 年) やスーフィー教団/修道所が廃止法 (1925 年) されているが、一部の地域のマドラサは陰で活動を続けてきたし、メヴレヴィー教団のような一部の教団の活動が黙認。(ナクシュバンディー教団が弾圧さるなど、一定しない態度があった)
アラビア文字からローマ字への移行やアザーンと礼拝の祈祷のトルコ語化
- 46 年以降 (複数政党制) : 世俗主義政策緩和: 宗教承認
モスクでの礼拝、葬儀等の宗教的なサービスを受けられない国民の不満・反発。脱宗教政策の緩和
アラビア語の使用の許容、宗教学校 (イマム・ハティプ学校) や神学部を設置
- 現在 : イスラーム主義政権にも関わらず、宗務庁と一部のタリーカや宗教団体 (Tr. Cemaat) が恩寵を受け、もう一部が排他されている
- 問題 : 宗教社会のこのような複雑な現状は如何に説明できるか。歴史の繰り返しなのか、それとも政策なのか

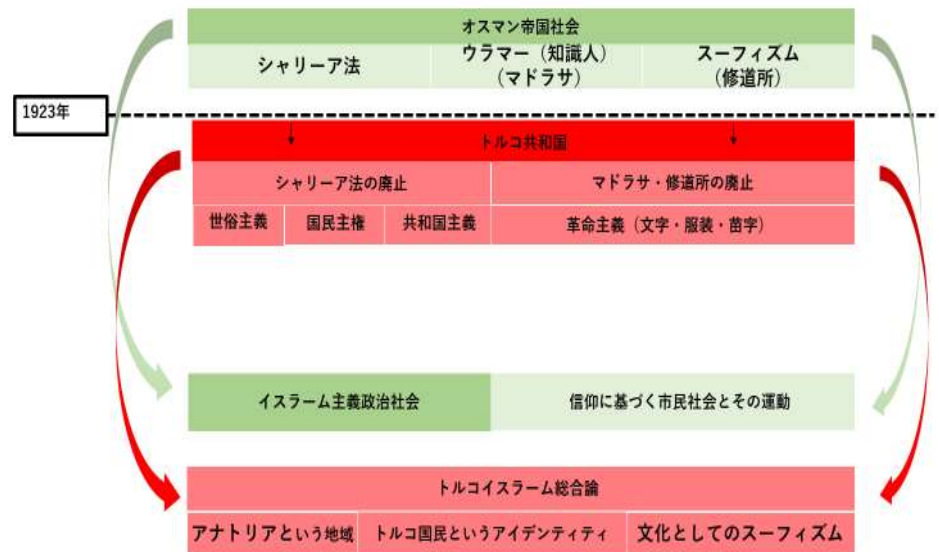
↑ 「トルコ・イスラーム総合論 (TIS)」の実施、内容の変化によるものでは?

2) TIS の定義・構成要素

- 定義（仮）：「イスラーム原理主義と異なる、トルコ性と宗教を合致させたイスラーム理解
- 3 要素：トルコ性、アナトリアという領土、スーフィー的なイスラーム理解・実践

オスマン朝期のイスラーム		トルコ共和国のイスラーム
社会；ムスリム共同体（ウンマ）	⇔	トルコ国民（トルコ性）
領土：オスマン朝	⇔	アナトリア（トルコ人の故郷）
スーフィズム	———継続——→	スーフィー的なイスラーム理念・実践
トルコ・イスラーム総合論		

3) 国家と宗教の関係の変容と トルコ・イスラーム総合論の形 成過程



セクション3：トルコ・モデル

1) 概念の誕生・意味の多様性

- 1923 年～1950 年：M.K.アタチュルクのモデル：共和国主義・世俗主義（イランのレザー・シャー・パーラヴィーによっても導入）
- 1990 年代～2000 年代：ソ連崩壊の中央アジアのチュルク系諸国家への経済モデル
- 2009 年：オバマ大統領の演説における「安全、豊かで信頼できる国際社会をつくるためのトルコと米国の間の『協力モデル（model partnership）』」

- 上記の記述の構成要素：
 - 協力関係：安全・豊で信頼できる国際関係の構築
 - 米国（欧米）＋トルコ＋その他（キリスト教世界、イスラーム世界）

2) トルコ・モデルの現実性と適応性

- 現実性
 - 外交面では、「架け橋」は機能している。例：ロシア対ウクライナ戦争の際の仲介役、捕虜交換の実現
 - 然し、民主主義の推奨や人権問題の解決という「近代的な」価値観の普及という分野においては、モデルになったと言えない
- 適応性
 - 「2011年に起った「アラブの春」の影響で崩壊した独裁政権の代わりに、民主主義に基づく国家の模範として、「トルコ・モデル」の導入が期待されていたが、実現しなかった
 - 自国の国益と、権力闘争が主たる理論・実践である「現実主義（リアリズム）」が盛んな現代国際関係においては、トルコ・モデルの導入は難しい
 - しかし、市民社会レベルでは可能だと言える。利他主義的な属性が強い社会運動は、共通の価値観・信仰に基盤を持つ社会であり、国家との関係がなければ、国境を超える交流、お互いのモデルの交換が可能であると言える

おわりに（まとめ）

- 本報告では、近代化、「トルコ・イスラーム総合論」、「トルコ・モデル」という3つの概念の観点から、1800年以降のトルコの西洋と中東との略史について考察しつつ、トルコの中東における位置づけを明らかにしようとした
- 現代トルコは、オスマン朝時代に始まった近代化を、国民主義や政教分離等の西洋的な価値観とイスラームを融合した、「トルコ・イスラーム総合論」政策にもとづいて実現しようとした
- その政策は、欧米社会にとって評価され、中東などのイスラーム社会における移転中の国家や社会にモデルとして提示された
- トルコは、そのような歴史的かつ地理的な位置による特徴のため、「東西の架け橋」という表現でしばしば描写される
- しかし、リアリズムに基づく国際関係が進められている現代中東において、民主主義やトルコ性が強調されるトルコ・モデルの導入は現実的ではないと言える
- 政情の悪化やグローバル化に伴って、中央アジアや中東からトルコや欧米社会に流れ込んでいく大量の難民および移民と受け入れ社会との間の文化交流は、今までよりも進んでいる。そのような観点からは、トルコは、今でも、「東西の架け橋」になっていると言える

参考・引用文献

Bilgili, A.S. 2014. “Eğitim Programlarımızda Türk-İslâm Sentezi Meselesi (1980-2000 Yılları Arasındaki Tartışmalara Bir Projeksiyon),” *Kafkas Üniversitesi, e – Kafkas Eğitim Araştırmaları Dergisi*, 1 (1), pp. 1-13.

Capelos, T., Chrona, S. 2012. “Islamist and Nationalistic Attachments as Determinants of Political Preferences in Turkey,” *Perceptions: Journal of International Affairs*, 17 (3) , pp. 51-80.

Elhan, N. 2016. “Money Talks: Turkish-Islamic Synthesis on Banknotes of Turkey,” *Moment Journal*, 3(1), pp. 171-189. Güvenç, B., Şaylan G. Tekel (eds.). 1991. Dosya: Türk-İslam Sentezi. İstanbul: Sarmal Yayınları.

Danışmaz, İdris. 2015. *The Turkish Model: Reality and Applicability*. Dosisha University.

İnalcık, H. 1998. “Türkiye Cumhuriyeti ve Osmanlı,” *Doğu Batı*, vol.5, pp. 9-18.

Oran, Baskın. 2004. *Türkiye’de Azınlıklar: Kavramlar, Lozan, Mevzuat, İhtihat, Uygulama*. Tesev Yayınları.

新井政美 2014 年『イスラムと近代化 共和国トルコの苦闘』東京：講談社選書メチエ. 新井政美 2013 年『イスラムと近代化：トルコ共和国の苦闘』講談社選書メチエ、6-12 頁

大島史 2005 年「トルコ『80 年体制』における民族主義とイスラーム：トルコ・イスラーム総合論を中心に」『イスラム世界』64 巻、1～20 頁.

鈴木慶孝 2014 年「現代トルコの世俗主義と国家的アイデンティティーに関する一考察：宗務庁組織の機能的な役割の検討から」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』77 巻、71-91 頁.